

## 小児鼻咽頭と成人痰培養から分離した *Haemophilus influenzae* 検出状況と薬剤感受性動向

◎押渕 のどか<sup>1)</sup>、菅崎 真央<sup>1)</sup>、平野 こなつ<sup>1)</sup>、下村 悠翔<sup>1)</sup>、永橋 麻衣子<sup>1)</sup>、岩永 里美<sup>1)</sup>、川崎 辰彦<sup>1)</sup>、古谷 明子<sup>1)</sup>  
国家公務員共済組合連合会 佐世保共済病院<sup>1)</sup>

【はじめに】*Haemophilus influenzae* は、髄膜炎、気管支肺炎、中耳炎などの起炎菌として重要視されている。小児の多くは上気道に保菌しており、当院は開業医からの紹介入院も多く、入院時にスクリーニング検査を行っている。今回小児鼻咽頭培養と成人痰培養から分離した *H. influenzae* の検出状況と薬剤感受性動向について調査し比較検討を行った。

【対象と方法】2015年1月～2024年12月の10年間に分離された小児計682株（0歳～5歳までの鼻咽頭培養）と成人計138株（18歳以上の喀痰培養）を対象とした。重複処理なし。 $\beta$ -ラクタマーゼ試験はニトロセフィン法（BDセフィナーゼディスク）を用いた。薬剤感受性検査はHTMプロス・MICroFAST4Jパネル（ベックマンコールター）を用いて微量液体希釈法にて行った（2020年10月からは6Jパネル使用）。発育不良株についてはサプリメント添加ミューラーヒントンブイヨン栄研・ドライプレート栄研QK07パネル（栄研化学）にて検査した。また、年毎に耐性菌検出率と各抗菌薬の非感受性率を集計し比較した。

抗菌薬はABPC、AMPC/CVA、ABPC/SBT、CCL、CTX、CTRX、CFPM、MEPM、CAM、LVFX、STの11薬剤について検討を行った。

【結果】詳細なデータについては学会当日の発表にて提示する。10年間の耐性菌検出率はBLNAS（Iも含む）小児46%：成人56%、BLNAR43%：39%、BLPAR9%：6%、BLPACR1.8%：0%で、小児の方がBLNAR、BLPAR、BLPACRの検出率が多かった。各抗菌薬の非感受性率は、10年間の年次推移は概ね減少傾向で、小児と成人で差が見られたのは、ABPC70%：58%、CCL48%：38%であった。成人のMEPMとSTについては5年毎の非感受性率を比較すると、MEPMは+12%、STは+7%で耐性傾向が見られた（小児はMEPM+3.5%、ST-2%）。

【考察】小児に耐性菌割合が多いのは、開業医での抗菌薬の使用が影響している可能性も考えられる。成人ではMEPMやSTの非感受性率増加傾向が見られ、今後の薬剤感受性動向について注意が必要である。

連絡先：0956-22-5136 内線（1154）